

代名詞とエンパシー回路

毛 利 可 信

1. NP 表現の流動性

今この稿を書いているとき、映画「クリスタル殺人事件」というのがかなりの評判を呼んでいるが、この映画の原作は Agatha Christie, *The Mirror Crack'd* である。筆者はこの映画を見ていないので、映画の中でどのように処理されているのか知らないけれども、原作では謎解きの一つのカギは、ふたりの女性が対面した場で事件が起るのを、そばで見ていた別の女性が報告するときに用いた “she” のあいまい性にある。つまり、この “she” がどちらの女性を指すのかがあいまいで、聞く人の間に誤解を生じたことが問題なのであった。このことについて、作者は、謎解きの場面で Miss Marple をしてこのようにコメントさせている。

(1) ...owing to the fact that people cannot remember to use their pronouns properly.

たしかに代名詞の用法や名詞・代名詞の使い分けの問題は微妙に流動的であり、複雑でむずかしい。さらに小説などで、ある場面で作中の人物に視点をあて、その人物と他の人物との間のやりとりを記述するとか、描出話法 (Represented Speech) を用いて心理描写をするとか、記述のレベルが錯綜してくると、感情移入 (Empathy) の問題が絡んできて、談話文法あるいは語学的文体論の重要テーマとなる。しかし、NP をどう表現するかの問題は決して適当に便宜的に処理してよいことではなくて、複雑に見えてもそこに一定のルールが存在することまたしかである。

本稿は感情焦点 (Empathy Focus ; 以下 EF) の設定や移動に応じて、NP の表現が、固有名詞、普通名詞、人称代名詞、再帰代名詞等と移りかわる実態を考察し、そこから、文のバランスを保ち、談話の流れにおける首尾一貫性を確保するためにどんな原理が働いているかを探る一つの試みである。

2. 後方照応の代名詞

後方照応の代名詞の典型的な例は、いわゆる付帯状況の句や節が前置され、その中の人称代名詞が、後方の主語である NP に照応し、これと同一指示 (coreference) の関係にあ

る場合である。

(2) On reaching his_i room, John_i took off his_i coat ...

(3) On reaching John's_i room, he_j took off his_j coat ...

同一指示の関係は指標 i, j の示すとおりで、(2)の his と John とは同一人で、(3)の John と he とは別人である。次の(4)と(5)でも同様である。

(4) While [he_i was] in London, John_i went to study under Professor Smith.

(5) While John_i was in London, he_j went to study under Professor Smith.

上の(4)では he と John とが同一人であり、この [he was] の部分は省略可能であるのに対し、(5)では John と he とが別人であるから、むしろそのような省略はできない。

この(2)と(4)で、同一指示において、先行の NP が代名詞、後方の NP が固有名詞で表現されるわけは、固有名詞 John に EF があり、そこから始まる部分が情報の本流であって、文頭の句や節は、この本流に流れ込み、その中に吸収されるべき支流にすぎないからである。これらの句や節は、その前の文脈を受けて、読者の視線を、後方の John という EF へ誘導するつながりに過ぎない。新聞記事などでも、このスタイルは、つながりの部分がサスペンスを与え、読者に緊張感を与えるから、迫力のある行文を生む。たとえば、次の文は1981年3月28日付の *Mainichi Daily News* からである。

(6) In his_i first public appearance since Bush_j was given the job of heading a foreign and domestic crisis management team, Haig_i said, "It's not true," when asked if he_i threatened to resign.

この(6)では、文頭の his が、同じ句の中に埋め込まれた従節の中の、別人 Bush を飛びこえて、Haig に照応しているのであって、この点は、his と Haig との間の距離の大きさとともに示唆的である。

さて、このような後方照応の代名詞はいろいろな形であらわれる。以下、用例出典の作品名のみ記したのは、すべて Agatha Christie の推理小説である。

(7) Against **her** will, **Mary** felt quite sorry for him. (*Towards Zero*)

(8) With **her** head on one side **Betty** made a cooing noise at Tuppence. (*N or M?*)

(9) Shaking **her** head in sad foreboding, **Lady Laura** moved majestically up the staircase. (*The Mysterious Mr. Quin*)

(10) Closing the door behind **him**, **Poirot** wandered round the room. (*There is a Tide*)

(11) When Rosamund Darnley came and sat down by **him**, **Hercule Poirot** made no attempt to disguise his pleasure. (*Evil under the Sun*)

(12) And since **he** was expecting the archdeacon to stay with **him** it certainly

seemed very odd—in fact it still does—that **the canon** should not have returned. (*At Bertram's Hotel*)

この(12)では文頭の従属節が長く、後方照応の代名詞が2個あるのが注目される。また次は、'it' の後方照応の例である。

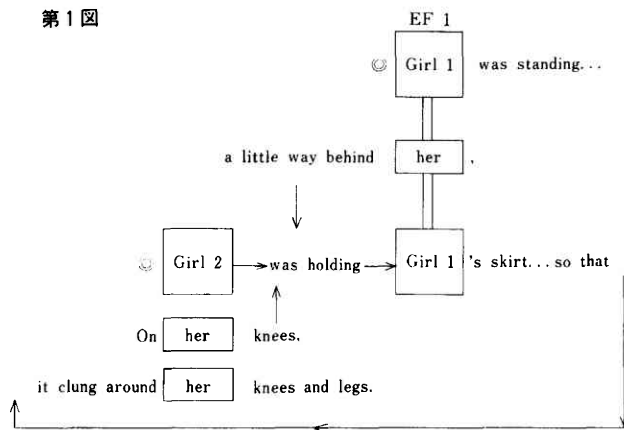
(13) “I don't need to make a speech,” said Mrs. Oliver. “Several other people who like doing **it** will be **making speeches** ...” (*Elephants Can Remember*)

次の例では二人の少女の相対的位置関係と動作の関係とがからみ合う場合における代名詞の使い方が複雑である。

(14) A slim **girl**_i wearing diaphanous organdie was standing clutching an immense hat. On **her**_j knees, a little way behind **her**_i, a second **girl**_j was holding the first **girl's**_i skirt well pushed back so that it clung around **her**_j knees and legs. (*The Mirror Crack'd*)

この(14)でとくに注目すべき点は on her knees の her は「第二の少女」であり、次の ... behind her の her は「第一の少女」であることである。つまり、On **her**_j knees, a second **girl**_j ... と続いて、支流が本流へと流入して行くその中間過程に、「第一の少女」との位置関係の記述が入りこむのであるが、her_j と a second girl_j の照応は、その中間の her_i によって乱されることがない。(14)を図解すると次のようになる。

第1図



すなわち「第一の少女」を EF とする文が完結した後に「第二の少女」を EF とする文がつづくわけであるが、その第2の文の中で第一の少女に対する言及が、名詞になったり、代名詞 (her) になったりする。そして、第二の少女をも her で受ける。それでいて混乱が起きないのみならず、この使いわけにルールが存在することは上の図解から読みとれると思う。

次に、(3)、(5)に立ち戻り、別人指示になる場合について考えたい。この場合、主文の主語が代名詞であるわけは、文脈を遡れば、その前の文においてすでにある NP が EF とし

て確立し、この代名詞はそれを受けているからである。つまり、「固有名詞による EF 確立」からあと、“she”, “her” 等の形でそれを受けて記述が流れてくるとき、そのものから見て「他者」が固有名詞で介入してきても、談話の本流はそれによって影響されないということである。このことの例を一つあげる。

(15) A certain air of constraint had settled over the three. **Mrs. Oliver_i** sensed it quickly. When **Rhoda_j** brought in tea, **she_i** rose and said **she_i** must be going back to town. (*Cards on the Table*)

これを見ると、Mrs. Oliver に EF が固定されており、そこを中心に、“Mrs. Oliver_i ... she_i ... she_i ...” という流れの中で、Mrs. Oliver_i は Rhoda_j の出現を受けとめている。このような文脈のとき、上の When ... の文のように、従属節は固有名詞、主節は代名詞ということになるのであるから、この二者が別人を指示するのは当然であろう。

しかし、それにも拘わらず、一見、この反例と考えられるような用例が存在する。すなわち、次の各例において、従属節は固有名詞、主節は代名詞という使いわけでありながら、これらは、文意から見て同一指示である。これはなぜであろうか。

(16) That evening, when **Tuppence** went to bed, **she** pulled out the long drawer of the bureau. (*N or M?*)

(17) When **Audrey** had dressed **she** went along the beach... (*Towards Zero*)

これらの従属節は一つの時点を指示すると同時に、その時点において、当該人物を EF に設定するという働きをしていると考えられる。(17)ではとくに顕著であって、これは、**Audrey** had now dressed, and **she** went ... と書き直されるように、実質的に等位節であり、時間的に、従属節の動作が先行しているのである。これが、次の as-節ではもっとはっきりしており、情報上のウエイトからいって、従属節の方がむしろ本流であり、主節の方が支流になっている。

(18) Only as the train drew out of the station and **Tommy** saw the forlorn little figure walking away down the platform did **he** feel a lump in his own throat. (*N or M?*)

(19) Nevertheless as **Nevile Strange** went downstairs this fine morning a shadow went with **him**. (*Towards Zero*)

(18)の own は、去りゆく Tuppence の悲しみと対照して「彼自身」の悲しみを表現するために用いられている。own の用法については、oneself との関連において後述する (→第5節, 第6節)。また、(19)は、「その日の Strange の姿には、暗い影がつきまっていた」ということであるから、ここで、“as **he** went ..., a shadow went with *Nevile Strange*.” などとしては、こっけいなことになる。なお “... with him” の ‘him’ は地点をあらわす代名詞として後述する (→第5節(33), (34))。

3. I 対 YOU

EF はすべて一人称の “I” に還元して考えることができる。描出話法では EF となっているものが “he”, “she” などであらわされるけれども、これらは話法の約束でただちに “I” に還元できる。また、話者が作中の一人物に視点をあてている場合、その EF がその当該人物にとって “I” であり、「してやる」「してくれる」「行く」「来る」等の方向づけまでが、すべて、その “I” を基準として記述されるわけであるから、EF に関する考察は、“I” すなわち「自己」と「他者」とのかかわりという考え方で処理してよいことになる。

さて、他者のはじまりは、話し相手としての “you” である。ここでは英語表現において “I” と “you” のどちらを主語にするかという問題を考えてみたい。次の例は、日英語の対照研究において表現の角度の相違ということによってよくとりあげられるものである。

- (20) { You win!
私が負けました。

このとき EF はそれぞれの主語、すなわち英語では “you” に、日本語では「私」にあるが、だからといって、この場合「相手を立てる」という気持ちにちがいがあるなどとは思われない。英語の方は “you” について有利な記述がなされるのだから、相手を立てたことになり、日本語の方は「私」について不利な記述をするのだから、それは謙虚ということに通じ、間接的に相手を立てたことになるわけである。“you” と「私」との間に、このような対立が見られるときは、常にこのような考え方が必要であると思われる。

- (21) “What’s that?” Cedric stared at her, stupefied.

“You heard me,” said Lucy. (*Mrs. McGinty’s Dead*)

これは日本語なら「今、ちゃんと言ったでしょう」とか「ものは言ってる間にきくものよ」とかなる場合である。

- (22) Rhoda rose and turned on the radio.

A raucous voice said, “You have just heard the Black Nubian play ‘Why Do You Tell Me Lies, Baby?’” (*Cards on the Table*)

これはアナウンサーのことばで、日本語では「…をお送りいたしました」となるところである。そして「相手を立てる」ための手段は、日本語では「お送りしました」という敬語に含まれていることになる。

もちろん、“You” を主語にし、そこを EF にする表現が常にこのような尊敬の表現であるとは限らない。“You” を EF にするということは、相手にその立場を意識させるという効果を持つのであるから、次のような文は、通例、母親がこどもにいうような発話であって、condescending な口調が感じられる。

(23) **You** shall have a pie.

同様の理由で、**You** had better ... という形式も「指図」をするような態度が感じられるという。“must”については2種あって

- (24) { A. You must go and see it.
B. You must come to Japan some day.

では、AとBとは politeness に関して大きなちがいがある。“You must”は一般には(24)A.のように「命令」と同等であるが、(24)B.のような、相手に有利な内容であると、最もていねいな歓待のことばとなる。

また、“You may”は周知のように、目上のものから目下のものへ許可を与える口調である。そうすると、May I ...? というのは、“I”をEFにしている、これは疑問文であって、疑問文というのは、——この場合、相手に“You may ...”といわせるための、——いわば、おぜん立てをするのであるから、当然へりくだった文になる。

次のような“I”を主語にする疑問文は日本語的発想からは遠いものであるが、いずれも、相手が「目上から目下にものをいうときの“you”を主語にした文」をいいうる立場のものであるとの前提に立つという点で謙譲語法となっているものである。

(25) *Am I addressing* Lady Chandler?

(26) Hale looked at Poirot curiously.

“*Have I convinced you* that it was a straightforward case?” he said.

(*Murder in Retrospect*)

ただし、次の例は、同じおぜん立てでも、相手が目下であり、相手から自分に「尊敬の“you”を使った文をいうべきものである」との前提に立つ。

(27) “*Did I see* you’ve got muffins here?” he asked.

Henry smiled benignly. “Yes, sir ...” (*At Bertram’s Hotel*)

4. 自己の拡大

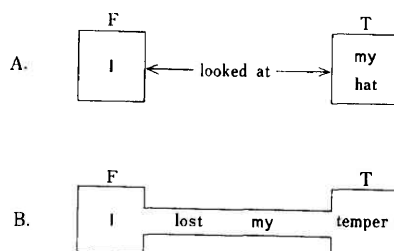
まず、次の2文における所有格代名詞の用法について考えてみたい。

- (28) { A. I looked at my hat.
B. I lost my temper.

この(28)Aでは“hat”は外的存在であり、だれの所有物にもなりうるものであるから、この“my”を、“your”、“his”、etc.にとりかえても、それぞれ意味をなす。(28)Bのtemperはlose one’s temper (かんしゃくを起す)というイディオムの要素であり、この語句は、主語である人物の内的活動すなわち精神状態の変化の表現であるから、この“one’s”は常に主語と一致すべきものである。I lost your temper. とか I lost their temper. などという文は全然意味をなさないわけである。従って、上述のEF中心の考え方によれば、

㉔Bのような所有格代名詞は、EF に本質的に内在する「自己」の延長を意味するものと解される。他動詞構文はすべて広い意味での相関関係の表現になっているが、㉔を相関関係というとき、A、Bにおける代名詞のちがいはやはり区別して扱う必要があると思う。いま主語を相関関係の始動点 (Fundament; 以下F)、目的語を終末点 (Terminus; 以下T) とするとき、㉔A、Bを図解すれば第2図のようになる。

第2図



この lose one's way と同類の「自己の延長」を指示する所有格代名詞は、ほかに go one's way; lose one's way; make up one's mind; take one's leave などがある。know one's ABC や say one's prayer などは一見ふつうの代名詞のように見えるが、やはり「本人の知識体系」や「本人の生活習慣」にかかわるものとして記述されているので、これも「自己の延長」である。従って(1)の use *their* pronouns も当然ここに入る。

「自己の延長」は次のように目的格でもあらわれる。

(29) She is rather strict. But **I** didn't let that worry **me**. (*At Bertam's Hotel*)

(30) "She got a notice to attend."

"Yes, but **she** needn't let that worry **her**." (*The Clocks*)

この場合、再帰代名詞にならない理由は、第5節で述べる (→(36) A, B, C)。

次に「I」を固有名詞で表現する場合について考えてみたい。固有名詞が内包を持つ可否は議論のわかれるところであるが、Gardiner (1951) の § 13 という意味の内包を認めるならば、「私」というかわりに固有名詞をいうのは〔旧陸軍で強制的に用いさせたようなケースを別とすれば〕その内包の力にたよって何らかの意志表示がなされていると見るべきであろう。たしかに、「天野屋利兵衛は男でござる」というから名セリフなのであって、これを「私は男だ」といったのでは、全然冴えないわけである。

(31) **Thomas Royde** moved slowly out of the bedroom and joined his friend.

He did not speak, for **Thomas Royde** was a man singularly economical of words. (*Towards Zero*)

ここでは、いったん「he」としながら、その直後でその人を「Thomas Royde」としているのが、有標の場合にちがいない。その有標性は、「ふだん、トマス・ロイドという男は無口で通っている」ことをふまえて、「トマス・ロイドという名で世間にきこえたこ

の男」という意味を打ち出したところにある。

(32) **Sir Matthew** and **Lady Tressilian** had come to Gull's Point thirty years ago. It was ten years since **Sir Matthew**, an enthusiastic sailing man, had capsized **his** dinghy and been drowned almost in front of **his wife's** eyes.

Everybody had expected **her** to sell Gull's Point and leave Saltcreek but **Lady Tressilian** had not done so. (*Towards Zero*)

この例では前半 Sir Matthew に EF があり、そこでは夫人は “his wife” であらわれ、次の文ではこれが “her” となり、その文の後半で改めて固有名詞で表現されている。実はこの最後の Lady Tressilian のところで、新しい EF が確立するのであり、その前の her は、EF 移行のつなぎとしてあらわれるものである。ゆえに、この代名詞と固有名詞とを入れかえるとバランスを失した文となる。そして、最後の有標部分の気持は「トレシリアン夫人ともあろうものが、その家を売ったりするはずはないのだ」ということである。以上の二例で、こういう固有名詞の用法はやはり強い自己主張であるから自己の延長として考察すべきだと思う。内包に依存するからとて、自己主張というのはおかしいという反論もありうると思うが、筆者は、こういう用法は、実質的に描出話法だとりたい。そして、そこに本人の自己主張を読みとりたいのである。³²⁾でいえば、まわりのものが「あの夫人は家を売るだろう」という目で見たのに対して、当の Lady T. 自身は心中ひそかに「この私が——Lady T. ともあろうものが——そんなことをしてたまるか」と思ったのがこの文に反映していると思われる。このように考えると、固有名詞の有標的使用はすべて先の「天野屋利兵衛」の場合に還元できるのではなかろうか。

5. 再帰代名詞

再帰代名詞は、たとえば動作主から発した動作がその動作自体に及ぶなど、同一物への回帰を意味するものであるから、ある EF との関連において、相関関係などの展開に沿っての視点の移動を考察するさいにとくに重要な問題を提供するものであることはまちがいない。ただし、「同一物への回帰」といっても、再帰代名詞の指示対象は、論理的には、一様でなく、少くとも次の三つに分けて考える必要があると思われる。なお、本稿では “I myself did it.” のような、いわゆる強調用法は除外する。

α. 再帰用法 : John killed *himself*.

β. 写像用法 : Mary showed me a picture of *herself*.

γ. 自我用法 : You were not *yourselves* (=your real SELF) then.

以下、この α, β, γ の 3 用法についてコメントしておく。

まず、α はいうまでもなく、相関関係の F と T とが一致することをあらわしている。従って、同一文中に同一指示があらわれていても、二つの NP が同一の相関関係の F, T と

して意識されない場合は再帰代名詞を用いない。たとえば

(33) I have no money with *me*.

(34) This was a moment for keeping all her wits about *her*.

などの目的格代名詞は、外的世界における「地点」の表示であって、動作主との間に相関関係はない。

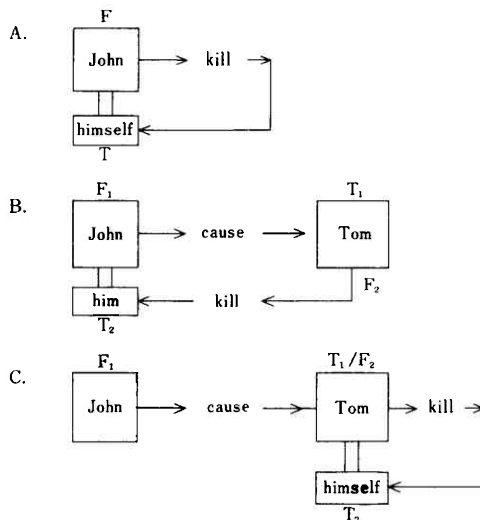
(35) { A. He saw a snake beside *him*.
B. He saw a snake beside *himself*.

このA, Bについてみると、Aは、上記のように“him”は地点の表示であるのに対し、Bは有標で、この場合は、「彼 対 蛇」が、たとえば、「恐怖心を持つもの 対 恐怖心を起させるもの」というように相関関係にあるものとして把握されている。

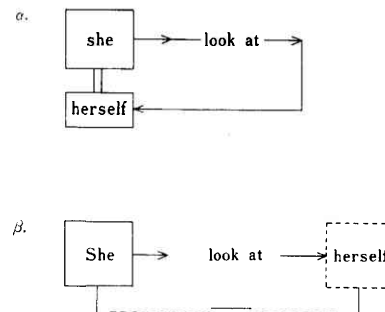
(36) { A. **John_i** killed **himself_i**.
B. **John_i** caused **Tom_j** to kill **him_i**.
C. **John_i** caused **Tom_j** to kill **himself_j**.

について比較してみると、Aは自明として、Bでは、文頭の John と文末の him とは同一人物ではあるが、そして、それぞれFとTではあるが同一の相関関係のF, Tではない。John は“John—cause—Tom”のFであり、him は“Tom—kill—him”のTである。Cにおいては、Tom と himself は“Tom—kill—himself”についてのF, Tであるから、この場合は、「トムから出た動作がトムに及ぶ」のであり、ここで himself が要求されるのは当然である。なお、(29)(30)で再帰代名詞を用いない理由も(36)Bに準じて説明できる。上記(36) A, B, C はいずれも John に EFがあるが、B, C では埋め込み文中 Tom に副次的 EF を生じ、B/Cの文末の代名詞は「トムから見ての他者／自己」となる。(36)A, B, C, を図解すれば第3図のようになる。

第3図



第4図



また, Edison taught himself. や The machine operates itself. などでは, 前提が x —teach—Edison. ; x —operate—the machine. であり, Edison—teach— x ; The machine—operate— x でない。ここに解釈意味論的な問題を生ずるが, これについては毛利 (1965) で述べたので, ここにはくり返さない。“Clean your own boots!” というとき, 「何を磨くか」が問題なのでなく, 「誰が磨くか」が問題なのである。[“one’s : one’s own=one : oneself” については第 6 節(43)参照]

次に, β の写像用法というのは, 同一指示といっても, それは物理的に同一ではなく, Jackendoff (1975) でいう “Image-Mary” の意味において写像を指す場合である。絵画, 物語, 想像, Belief などの中の人物はすべて写像であるから, その場合の oneself は, 原体の写像という意味での同一指示関係をあらわすにすぎない。

(37) I hate to hear a story about *myself*.

(38) She imagined *herself* in Wonderland.

(39) She looked at *herself* in the mirror.

この(39)が, もし, in the mirror を欠くならば, それは二通りにとれる。本当に自分のからだを調べてみたのなら, α の再帰用法で, 鏡にうつった自分の姿をみたのなら, β の写像用法である。“She looked at herself.” の二義の図解は前頁第 4 図となる。

(40) Mary said that there was John’s picture of *himself* in the post office.

この(40)を picture of *herself* (=Mary) とすることはできない。それは, John’s picture of ... というところに「ジョンが x を描く」という相関関係が設定せられ, “John—draw—himself” で再帰用法が生ずるからで, Mary の写像が herself の形でここに入ることはできないのである。

最後に γ の自我用法というのは, “oneself” の中の self が one’s real self という名詞相当語であり, 第 4 節で述べた「自己」を意味する場合である。前出の γ の例の yourself は自明であるが,

(41) I asserted *myself*.

というのもそれであり, この場合, myself の代りに you とか him とかが来ることは考えられないのである。あるいは assert という語は常に I assert *something*. という形で使うということからもそれはいえる。

このように考えると, 通例, 再帰用法といわれているもののうち, 精神面に関するものは自我用法に入れるのが正しいと思う。たとえば, avail oneself of, deliver oneself of, behave oneself, prepare oneself, pride oneself on, resign oneself to, etc.

6. 総合的考察

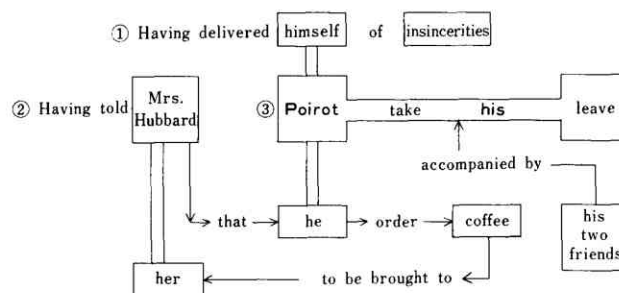
ここでは, やや長い例文を引き, これまで述べてきたことを総合的に適用して分析して

みたい。

(42) Having delivered **himself** of various polite insincerities, and having told **Mrs. Hubbard** that **he** would order coffee to be brought to **her**, **Poirot** was able to take **his** leave accompanied by **his** two friends. (*Murder on the Orient Express*)

このはじめの方の himself は自我用法であり、終りの方の take his leave の his は「自己の延長」である。これを念頭において(42)を図解してみよう。

第5図



次は、描出話法でポワロ探偵の心理描写である。

(43) Besides there was no sign or trace of any other murder that had been committed about then. No other death that could have sent **her** hot-foot to consult **him** after listening at a party to the lavish admiration of **his own** achievements which **his friend Mrs. Oliver** had given to the world. (*Third Girl*)

ここでは、ポワロ自身を“**I**”としてそこに EF がある。ゆえに consult him は「この私のところへ相談にとんでくるような」であるが、ここが himself とならないわけは(30)B. で解説した通りである。一方 his own achievements について考えると、前にもふれた通り、his と his own の関係は him と himself の関係に対応するわけであるから、これだと上の him と合わないように見える。事実ここは **his** achievements でもよいように見える。それをことさら his own とするのはなぜであろうか。強調かも知れないが、ここは別に強調する理由もない所である。筆者はここは、admire という動詞の意味に支配された、写像領域だと思うのである。つまり、再帰代名詞の写像用法を所有格に反映したものであるからこそ、ここを his own ... とする必要があるのだと思う。念のために類似のケースをもう一つ引用しよう。

(44) *Linda Condon* is an exquisite study of the worship of **her own beauty** by a woman. (*Murder in Mesopotamia*)

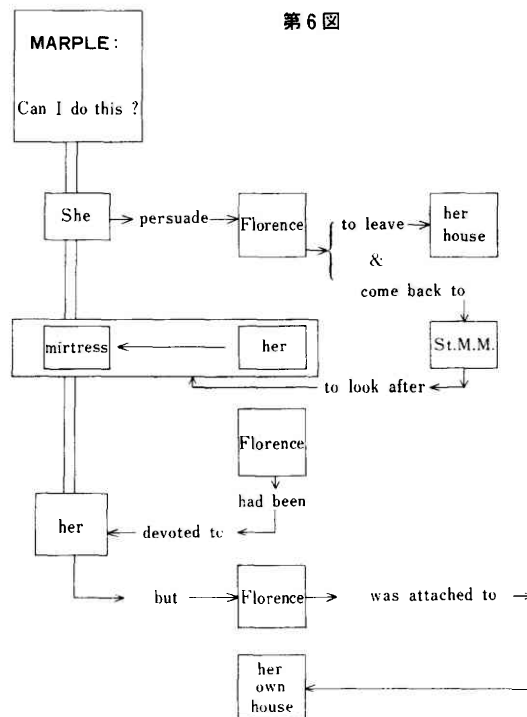
ここは「女が自分自身の美を崇拝する事象」の研究として *L.C.* という本がすぐれて

いることを述べたのであるが、ここでは明らかに、この *her own beauty* は、“A woman worships *herself*.” というときの目的格の再帰代名詞を所有格に shift した形であり、しかも worship という精神作用の中に描かれた人物は筆者のいう写像なのであるから、(44) は(43)の傍証となっていると思う。

次はマープル女史の心理描写でやはり描出話法になっている。「以前のメイドが再び、この私の所へ戻ってきてくれるかしら」と思っているのであるが、「この私」の表示法に注目されたい。

(45) Could **faithful Florence**, that grenadier of a former parlourmaid, be persuaded to leave **her** comfortable small house and come back to St. Mary Mead to look after **her erstwhile mistress**? Faithful Florence had been very devoted to **her**. But faithful Florence was very attached to **her own** little house. (*The Mirror Crack'd*)

まず(45)を第6図のように図解しておき、これについて若干のコメントを付して結びとしたい。



第6図の左上の大きな Marple のワク以外の所は全部マープル女史の想像の内部であるから、ほんとうは点線でかこむべきであるが、簡略化のため点線ははずした。Miss. Marple が EF であるが、Florence の所にも第二次の EF を生じ、そのフロレンスから見ての「昔の主人」という形で Marple に回帰している。これが第一段の回帰であるが、これは、フロレンスとマープルの間に「使用人对主人」という相関関係をふまえている点にも注意を

喚起したい。次の第2段では、「昔の主人」であるマープルを、こんどは her としている。それは、次のフロレンス自身の家を her own ... house としたのと対照をなす。これは、「昔の主人に対する忠誠」と「自分の家に対する愛着」が対照、あるいはディレンマを描き出しているのであって、そのことの表現として、Marple へは “her” で、Florence へは “her own” で回帰するから、ここに表現上の安定感が得られているのである。

参考書目

- Caton, C. E. (ed.) (1963) *Philosophy and Ordinary Language* Illinois University Press.
- Evans, G. (1980) “Pronouns” *Linguistic Inquiry* 11—2.
- Gardiner, A. H. (1951²) *The Theory of Speech and Language* Oxford University Press.
- 原口庄輔 (1981) 『変形文法の視点』こびあん書房。
- Higginbotham (1980) “Pronouns and Bound Variables” *Linguistic Inquiry* 11—4.
- Jackendoff, R. (1975) “On Belief-Contexts” *Linguistic Inquiry* 6—1.
- Jespersen, O. (1924) *The Philosophy of Grammar* George Allen and Unwin.
- (1933) *Essentials of English Grammar* George Allen and Unwin.
- 加藤雅明 (1980) 「英語における照応関係の原理について」〔英語学 22〕(開拓社)
- Kuno, S. & E. Kaburaki (1977) “Empathy and Syntax” *Linguistic Inquiry* 8—4.
- Linsky, L. (1959) “Reference and Referents” in Caton (ed.) (1963).
- 丸田忠雄 (1979) 「英語再帰代名詞の研究——A-reflexive と P-reflexive について」〔言語の科学 第7号〕
- 村木正武・斎藤興雄 (1978) 『意味論』(現代の英文法 2) 研究社出版。
- 毛利可信 (1965) “The Machine Operates Itself!” 英語青年 4 月号。
- (1980) 『英語の語用論』大修館書店。
- 名和雄二郎 (1979) 「Oneself 第3用法」〔国士館短期大学紀要 5 号〕
- 西垣内泰介 (1978) “Notes on Logical Form and Types of Coreference” *Osaka Literary Review* No. 17.
- 大江三郎 (1977) 『現代英語文法の分析』弓書房。
- Soga, Machiko (1980) “Empathy Constraints on Reflexives in English” *Linguistics and Philology* 1 (名古屋大学)
- Strawson, P. F. (1950) “On Referring” in Caton (ed.) (1963).